

松江城下町遺跡の遺構と町割

城郭史グループ 松尾 信裕
(大阪城天守閣)

1. 松江城下町の構造

城下町の建設は慶長12年(1607)に着工され、慶長16年(1611)に完成したとされています。松江城下町が築かれた慶長年間、日本各地に大名の城下町が建設されていました。この時期の城下町はそれまでの山城を中心とした狭隘な地形を選択せず、流通の便がよく広い空間を確保できる沖積平野に城下町の建設が進められていました。領国の支配を貫徹させるために、また、様々な物資の流通路を掌握することができる広い平野部に城下町がつくられるようになったのです。



この頃の城下町の基本的な形を見てみますと、天守が建つ本丸を核として、その周囲に付属の曲輪を設けた城郭を築きました。城下町の中心となる城郭は、平坦部につくられることもありますが、多くは小高い丘を利用していることが多いです。やはり、戦国時代以来の防御を優先した考えが残っているのかもしれないし、城下町周辺を見通せるように、あるいは、城下から見上げられるように小高い場所を選地したのでしょう。

城郭の周囲には上級から中級の家臣団の屋敷地を配置しました。そして、その外側に町人地を配置し、それらを囲むように寺社や下級の家臣団屋敷を配置しています。近世城下町は身分や階級の違いによって住む人たちの場所を決めており、武家社会の秩序を表現したものと言えます。

城下町は領国内の中心都市でしたので、領国の各地から様々な物資が集まる場所でした。また、領国内の産業の中心であり、領国内に住む全ての人たちの生活必需品が集まる場所でした。そのため、城下町は領国各地と道路でつながり、その道路が城郭や家臣団が居住する地域を避けるように、城下町の中を貫通し、その道路に面するように商品の流通や生産にかかわる町人が住まう地域が設定されました。

城下町の主な居住者は武士ですが、その生活を支える町人を住まわせる必要があります。城下町の主である大名は、町人を自らの城下町に居住させるために、城下町の中に町人達が集まって住む一角を建設します。その形は、日本全国ほぼ共通しており、城下町を貫通する直線に伸びた道路に面して、あるいは、城下町を取り囲むように鉤型に折れる道路の両側に、ほぼ等間隔の間口を持った奥行き等の敷地を配置させています。この形の最初は、織田信長が建設した尾張(愛知県)小牧城下町ではないかと考えられます。

城下町が平坦な平野部に建設される場合、城下町以前にはその近隣に海や川に面した港町が存在していた場合が多くあります。これはその港町から遠隔地との水運を介した流通機能と、領国内の周辺地域へつながる道路が存在していたことに着目したからなのです。新しく領主になった大名は、そうした既存の流通拠点を城下町に取り込むことを行います。

松江を選んだ理由の一つには、中世から存在していた末次や白潟の集落の存在が大きいと考えられます。これらの集落はこの地域の拠点となる町であり、磨師や塗師・鞆師・鈿細工師などの手工業者が住んでいたことも記録に残っており、中国の明代の史料には白潟を出雲地方の港湾の一つと記しており、

一定程度の規模の港町として発展していた可能性があります^(注1)。

松江は宍道湖に面する流通に適した土地でしたが、城下町が建設される前のこの土地は、城が築かれる亀田山の周囲には低湿地が広がっており、近世初頭になっても深田や湿地が残っていました^(注2)。生活空間に適した所と言え、宍道湖の水流によって形成された砂州が宍道湖の北岸東端と東岸北端に延びており、そこに末次や白潟と呼ばれる中世の小規模な集落が展開していたようです。

松江を選択した堀尾忠氏は、狭隘な富田城下町を離れて、宍道湖の周囲に広がる平野部に移転してきたのですが、広い城下町空間を確保するためには、低湿地を生活可能な土地へと造成していかなければなりません。そうした城下町建設時の土木工事の跡が近年の発掘調査で確認されています。

こうした土木事業は松江だけのことではなく、江戸や大坂をはじめとする多くの城下町で行われており、近世城下町の大きな特徴と言えます。たとえば、山を切り開いて城郭を築くにしても、本丸や二の丸・三の丸と呼ばれる曲輪を広い平坦地にする必要があります。切り取った土砂で低い谷を埋め、広い曲輪を出現させていったのです。家臣団屋敷や町人が住まう城下町へも切り取った土砂を盛土して造成したのでしょう。平野部でも凹凸のある土地も平坦にしないと建物を建てることができませんし、湿地は厚い盛土で覆い、乾燥した土地へと変えていかなければなりません。近世城下町は、建設以前のその場所の歴史を包括し、様々な努力によって出現したニュータウンと言えます。

2. 武家屋敷地と調査成果

「堀尾期松江城下町絵図」^(注3)を見ると、松江城下町の武家屋敷は内堀で囲まれた本丸と二之丸と、その南に接続する三之丸を中心に、その周囲に上級家臣団の屋敷地を配置しています。特に500石以上の家臣の屋敷は、城の東の殿町や母衣町に集中しています。堀尾氏の後の京極氏や松平氏の時にも同じような配置が見られますので、城の東側が重臣達の居住空間だったようです。殿町と母衣町、さらに城の西の内中原町は城に近いこともあり、外堀によって囲まれていました。殿町と母衣町は内山下とも呼ばれる場所で、中級以上の家臣団が居住する空間でした。

外堀の東にある南北の田町は城下町以前には低湿地で、名前もその地形や土地利用に由来するものでしょう。発掘調査では最下層に沼地のような環境で堆積した地層が見つかっており、城下町建設の際に造成されて出来上がったことが確認されています。ここには重臣の下屋敷も配置されており、東からの攻撃に備える目的もあったのでしょう^(注4・5)。西の外中原町は重臣の下屋敷もあるものの、多くが下級家臣の屋敷地として利用されています。このように、東西南北の道路によって整然と区切られた街区の中に、階級や身分の違いを基に石高に相応しい広さの屋敷地が宛がわれていたのです。

松江もそうですが、多くの城下町は街区を方形あるいは長方形に区画する道路を敷設し、整然とした街並みを形成しています。それには町作りの基準となる方位が存在するのですが、これについては後ほど町人地について考えた後に検討します。

また、城下町建設以前、この地域は低湿地が広がっていましたが、そうした環境をどのように克服して城下町を建設していったのでしょうか。以下で、松江城下町遺跡で行われた武家屋敷の発掘調査の成果を基に検討していきましょう。

近年、松江城大手前の駐車場から東に延びる城山北公園線と呼ばれる東西道路の拡幅工事に先立つ調査と、松江歴史館建設に先立つ調査がありました。

そのうちの一つである松江歴史館建設に先立つ調査の成果を見てみましょう^(注6)。ここは殿町の北西角に位置し、堀尾期以来、京極期、松平期と連綿と重臣の屋敷が存在していました。最下層の湿地の地層を覆い尽くす人工的な盛土で生活可能な敷地へと造成し、その上に屋敷の建物などを構築しています。

屋敷地の全域が発掘調査されていけませんので屋敷地全体の建物配置ははっきりとしませんが、屋敷地のある街区方位に沿う溝で屋敷地を囲い、その中に敷地方位に軸をそろえた建物がありました。

推定される入口から少し入った場所に中心となる建物があり、その脇には客間をもった建物と池を配した庭園も造営されていました。池は単に窪んでいただけでなく、岸には石を貼り付け、景色としての巨石も用いられていました。この屋敷の主は庭園を愛でながら憩える空間まで持っていたのです。また、周辺部には小規模な建物や台所と推定される建物が配置されています。これらの背後には畑があったことが判明しています。武家屋敷は町屋とは違い、一つ一つの敷地が塀で区画され、外部から見られない状態に遮断されています。その周囲に溝が巡らされることもあります。そうした区画施設に囲まれた中に、屋敷の主の石高に見合った生活を満たす建物や付属設備が整っていたのです。

この屋敷地からは多くの生活道具が見つかっています。その中でも陶磁器が多く見つかっています。生活道具はその時代の生産技術を反映するもので、その形や作られ方から、いつの時代につくられたものがある程度わかっています。

松江が城下町として建設される前後の16世紀後半から17世紀前半は、国内の陶磁器生産が大きな変化を見せる時期でした。それまで日本で使用される食器の多くは中国から輸入される陶磁器に頼っていたのですが、東海地方の美濃で瀬戸美濃焼が大量に生産されるようになり、広く国内に流通するようになってきました。この時期は国内のいたるところで城下町が建設され、そこに居住する人々の食器として使用されるようになったのです。

この頃の国産陶器は鉄釉を掛ける色彩の濃いものや灰釉を掛けた黄色みを帯びた単彩のものばかりでした。そのような中であって白い生地に絵を描いた中国製の青花は日本人の憧れだったのでしょう。その青花を模倣するように、美濃では白い釉薬が発明され、その上に鉄釉で簡単な絵を描いた志野と呼ばれる焼き物が出現します。ほぼ同時期に九州の肥前でも鉄釉で絵を描いた唐津焼が作られるようになりました。その後、美濃では緑色の釉薬を掛ける織部と呼ばれる焼き物が作られます。そして、国内で初めて白い生地の磁器（伊万里焼）が肥前で生産されるようになります。

こうした陶磁器の生産技術の変化が国内各地の城下町遺跡の発掘調査で把握され、ある程度の年代もわかるようになってきています。大坂をはじめとする近畿地方の城下町では志野や唐津焼が食器として使われるようになるのは16世紀末のことで、大坂では豊臣秀吉が没する慶長3年（1598）頃から志野や唐津焼が見つかります。そして、織部は少し遅れて出始め、大坂の陣の頃に大量に出回ります。よく、「桃山の茶陶」と呼ばれる茶会席の華やかな食器は、秀吉のころではなくその息子の秀頼の時代の食器なのです。そして、肥前磁器（伊万里焼）は大坂夏の陣の時には使われておらず、大坂が徳川の直轄地となった1620年代中頃になって多く使われるようになっていきます。

こうした出土する食器の変化からそれぞれの遺跡の時期がある程度判明するのです。この屋敷地で出土した陶磁器もそうです。この屋敷地では大きく4面の生活面が確認されています。一番下に堀尾氏が城主として松江に入ってきた直後の生活面があり、それ以降の生活面が上に形成されていました。

最初の生活面からは国産陶器では九州肥前の唐津焼と呼ばれる陶器が多く出土しており、17世紀前半になって大坂に出回る肥前磁器（伊万里焼）は見つかっていません。その代わりに中国製の青花がたくさん出土しています。美濃の焼き物である志野はあまり見つかっていません。生産地が遠いことが原因なのでしょう。江戸時代になっても中国地方の日本海側では美濃の製品よりも肥前の製品が多く流通しており、陶磁器のことを「からつもん」と呼ぶこともこのことに起因しているのでしょうか。こうした陶磁器の年代観から堀尾氏が城下町を作った最初の生活面は17世紀初頭と考えてよいでしょう。城下町建設が1607年とされている松江の年代観に適合します。

この生活面の上に、京極期の生活面がありますが、そこから出土する陶磁器には肥前陶器の唐津焼が相変わらず多いですが、肥前磁器の伊万里焼も含まれるようになります。さらに上層の松平期の生活面では肥前磁器（伊万里焼）が圧倒的に増加してきています。併せて、それまで多く見られていた中国製の青花が減少してきます。これは中国の明から清への交替に併せて中国からの輸出が大きく減少したことにも原因がありますし、肥前の磁器生産の活発な動きがあったことがわかります。こうした食器の変遷はこの家老屋敷だけのことではなく、他の武家屋敷でも同じです、また、日本各地でも同様の傾向を示します。肥前で陶磁器生産が陶器から磁器へと大きく変化し、それを大量に国内各地へと流通させるようになったのです。

3. 町人地の構造

松江での町人地の発掘調査は数多くは行われていません。一部、大手前線の建設に先立って米子町の一角が調査されている程度です。町人地の構造は、道路に接して間口を開く建物が敷地の間口いっぱい建てられるのが特徴です。武家屋敷とはそれが大きな違いです。また、敷地の間口は武家屋敷よりも狭く、奥に長い敷地です。この構造は日本各地の城下町と共通する構造で、この時期に出現した城下町の一般的な形です。

町人地の構造がわかるのは、今に伝わる「堀尾期松江城下町絵図」や「京極期松江城下町絵図」です。この二つの絵図には城の南に東西方向に広がる末次地区や、大橋川の南に広がる白潟地区の町人地が一つ一つの敷地の境まで丁寧に描いてあります。さらに、それらの絵図では敷地の背後の町境でもある背割下水の線も直線になっているのが確認できます。それらを見ると、町境が直線になっているので、同じ町に属する敷地の奥行きは、同じであることがわかります。

末次地区では今でも町の境となる背割下水が残っています。これまでに何度か末次地区を歩いてみましたが、末次地区の北にある外堀に面する片原町とその南の苧町や西茶町・東茶町の境になる背割下水は幅1m未満の下水として今でも生き続けています。江戸時代初期に設定された背割下水が現代まで踏襲されているのです。

末次地区は苧町から末次本町までの東西道路の両側に間口を開く町と、北の外濠に面する片原町があります。当時は道路の両側に町人地が建ち並ぶ苧町・西茶町・東茶町・末次本町が中心だと言えます。片原町は道路の一方には外堀がありますので、両側町とはなりません。道路の片方の腹にだけ町屋が連なる片腹（原）町なのです。町名は町の構造まで如実に言い表しているのです。昔からの町名は町の歴史を物語ります。簡単に町名変更はすべきではないのです。

さて、松江では町人地の発掘調査はさほど行われていませんが、町人地の調査を数多く行っている大坂の事例を紹介しその構造を見て行きましょう。近世城下町の町人地の構造は全国的によく似た構造をしており、今後、松江城下町で町人地の発掘調査が行われればその参考になると思いますし、他の遺跡の町人地の構造を見ることで松江の町人地がどのような形をしていたか推測できます。

大坂では秀吉が大坂城を築く直前から町人地の建設が始まっています。豊臣時代の町人地は大坂城下町は中世から都市であった四天王寺門前町と渡辺津と呼ばれた港町を町人地として取り込む手法を採用しています。四天王寺門前町は古代以来崇拜されてきた四天王寺の周囲に形成された町です。室町時代には七千軒もの町屋があったと記載する史料もあります。ここには様々な手工業者や商人が居住しており、新しく建設される大坂の流通や経済を支える町だったのです。また、渡辺津も古代には難波津として存在していた港でしたが、中世には京都から四天王寺参詣や和歌山の熊野参詣の中継港として繁栄していました。秀吉はそうした以前から繁栄していた都市を自らの城下町に取り込みました。まさに堀尾吉晴が松

江開府の際に末次や白潟を取り込んだことと同じ手法で城下町を建設しているのです。

町人地の中の敷地を発掘調査しますと、最下層には秀吉以前の遺跡がありますが、そこで見つかる遺跡の方向は秀吉の城下町とは異なった方向になっています。新しく建設した城下町は以前の町の上に盛土したり削平したりして平坦な土地を造成し、その上に新たな基準に則った直線の道路を等間隔で敷設し、計画的な配置をもった町となって出現しています。

発掘調査の成果では、道路に面した敷地の表部分に礎石を用いた主屋が建ち、一番奥には蔵が建ちます。ただ、敷地全域に建物が建て込むのは少し遅れるようで、蔵がなく大きなゴミ穴が広がる敷地も見つかっています。敷地の所有者の経済力の違いによって敷地の活用には違いが認められます。隣との敷地境は板を護岸とした溝です。

敷地の裏の背割溝は城下町建設当初にはなかったのではないかと考えています。隣との敷地境の溝が一番奥まで直線で延びておらず、敷地の途中にある大きなゴミ穴で止まっている敷地があるからです。当初は明瞭な背割溝がなかったのかもしれませんが、その後、町の拡大に伴って整備されてから背割溝が敷設されたのではないかと考えています。下水は流出先となる堀や川まで繋がるようにしないと排水できません。城下町全体の排水システムが完成しないと下水が機能しないのです。大坂では東横堀川や西横堀川などの主要な堀川が掘削されることで排水システムが完成したのではないかと考えています。

敷地内の利用は時代が新しくなると活発になり、敷地全域に礎石建物が建てられるようになります。それに伴って大きなゴミ穴は作られなくなり、建物のない狭い空間に小型の四角いゴミ穴が作られるようになります。また、主屋や蔵の地下に穴蔵が作られます。初めの穴蔵は壁や床に板を貼ったものでしたが、17世紀末頃から加工した石材を使用するようになります。火災に遭っても焼けないようにしたのでしょう。敷地奥に建てられていた蔵も基礎構造が変わります。初めは1m間隔で礎石を並べる礎石建物でしたが、これも17世紀末頃から壁の下に大きな石を敷き詰めたベタ基礎のような構造へと変化します。これは壁構造が以前より厚く作られるようになったために、基礎を頑丈にしたのであろうと考えています。火災に遭っても財産が焼失しないように、財力をかけて重厚な壁をもつ堅牢な蔵を建設したのでしょう。先に述べた敷地境の溝の護岸も木製の板から石へと材料が変化します。板よりも堅牢な石材が建築資材として需要が増し、それに伴い石材を加工し販売する生産流通体制も整備されてきたのでしょう。

松江城下町でも同じようなことが発見されるのではないかと考えております。今後の発掘調査が期待されるところです。

4. 城下町建設の基軸

松江は城を中心に武家屋敷や町人地の道路がほぼ同じ方向で建設されています。南北道路は概ね北で4度ほど東に振った方向であり、東西道路は東で南に4度ほど振っています。この方向が何に規制されたものなのかを考えてみます。

松江を建設する時は城郭のある亀田山の周囲には低湿地が広がっていたことは最初に述べました。生活空間として可能だったのは、末次地区や白潟地区くらいしかなかったのではないかと述べました。そうすると、城下町の基軸を最初に設定できる場所は町人地である末次地区や白潟地区しかありません。この二つの地区は宍道湖の水流によって形成された砂州で、周囲よりも一段高くなっていたと推定できます。また、そこにはすでに町場が形成されており、そこに武家屋敷を配置するには町人地の移転を強要しないといけません。

当時の城下町建設政策にあたって、城下町を繁栄させる町人の存在は無視できません。堀尾吉晴も以

前から居住していた末次や白潟の町人を優遇するために、また、既存の港湾機能を存続させるために町人地の移転は強制せず、同じ位置に町人地を設定したのではないかと考えます。その際の基本軸として、末次地区の砂州の中央に、砂州の脊稜線に沿った新しい方向の直線道路を設定し、新たな町人地として出現させたのではないのでしょうか。砂州の中央に道路を敷設することで広く町人地が確保できます。それが末次地区の両側町となっている苧町・西茶町・東茶町・末次本町なのではないかと考えます。この道路は苧町と西茶町の境で屈曲が見られ、この街区の北側の敷地の奥行きも同じ位置で少しずれていますが、この道路の北にある片腹町ではその場所で東西の街区の奥行きを少し違えて、堀に面する片原町の通りは一直線になるように調整しています。

この末次地区の東西道路の方向を城下町の街区の基本軸として、これに平行・直交する道路を配置する城下町全体の基本設計が行われたのではないのでしょうか。末次地区の東西道路に平行して城の南外堀が掘削され、それに直交するように東西外堀が掘削されて城郭を圍繞するようになったのでしょうか。西の外堀は一部が斜めになっていますが、これはそれ以前の地形をそのまま利用したのでしょうか。武家屋敷地が広がる城郭の東の殿町や母衣町さらに田町も、城下町全体の基本設計に基づいて街区が建設されたと考えられます。

城の東にある殿町や母衣町さらに田町の調査では、城下町の地層の最下部に素掘りの大きな溝が見つかっています。これは現在の道路と同じ位置にあるのではなく、少しずれた位置で見つかっています。湿地であった地域の土壌を乾燥させるための排水溝と推定されますが、現在の道路と同じ方向に延びています。城下町の街区を設計するための溝であり、その広がりや最初の城下町の範囲を示しているのではないのでしょうか。



「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館蔵）

白潟地区では大橋から南の白潟天満宮までの白潟本町・天神町が両側町を形成していますが、この道路は末次地区の道路とは直交せず北で西に振り、また一直線とはならず白潟本町と天神町の境で屈曲し、微妙に撓んでいます。これは白潟地区の基盤となる砂州が北で西に振った方向に形成され、曲線を描いていたのではないかと考えています。

松江城下町は建設時期や城主の交替時期などがわかっており、松江歴史館や城山北公園線の発掘調査では松江開府以来の生活面や地層が良好に残っていることがわかりました。それぞれの生活面から出土する陶磁器などの生活道具の組み合わせも特定できます。松江城下町は形成過程や生活道具の年代観を提案できる良好な材料が埋もれているのです。松江での今後の発掘調査や城下町研究の成果は、日本各地の近世城下町遺跡の研究の進展に大いに貢献できると考えられます。

(注1) 山根正明、『堀尾吉晴－松江城への道』 松江市教育委員会 『松江ふるさと文庫』6 2009

(注2) 島根県教育委員会、「平成22年度石見銀山遺跡関連シンポジウム 都市「松江」と石見銀山」パネルディスカッションにおける西島太郎氏の発言 『平成22年度 石見銀山遺跡関連講座・シンポジウム記録集』 2011

(注3) 松江市教育委員会、「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館蔵）『絵図で見る城下町 松江』 2007

(注4) 松尾 寿、『城下町松江を歩く』I ふるさとブックレット 山陰の自然と文化2 1986 たたら書房

(注5) 松尾 寿、『城下町松江の誕生と町のしくみ』 松江市教育委員会 『松江ふるさと文庫』5 2008

(注6) 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団、『松江歴史館整備事業 松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外）発掘調査報告書』 2011